

教員養成大学の「独唱」の授業に関する研究

—— オンライン授業から対面の舞台での演奏会への軌跡を中心に ——

藤田文子*・藤田香織

(2023年12月6日受理)

A Study on "Singing" Classes at Teacher Training University Universities: Focusing on the Trajectory from
Online Classes to Face-to-Face Concert

Ayako FUJITA and Kaori FUJITA

キーワード: 教員養成大学, 「独唱」, オンライン授業, 対面, 演奏会

本研究は、教員養成大学の「独唱」の授業に関して、オンライン授業から対面の舞台での演奏会への軌跡を中心に検討したものである。2019年のコロナウイルス感染対策まで、筆者の「独唱」の授業に取り入れることの無かった、オンライン授業に関して扱っている。先行研究などの吟味や、筆者たちの授業分析を通して、現代におけるオンライン授業の、独自の価値とも言える「学び」について検討した。その結果、こういった「学び」は、対面の舞台での演奏会にも、矛盾なく、敷衍可能であることがわかった。すなわち、オンライン授業における「学び」は、対面授業の「学び」にも通底すると考えられた。ともすれば、実技と切り離され、無価値なものと考えられるオンライン授業の有用性について、対面授業の価値を損なうことなく、対話を中心にした形で、抽出したことに特色がある。また、オンライン授業におけるゲストティーチャーの価値についても論述した。

はじめに

藤田文子は、1997年の着任以降、教員養成大学、すなわち、茨城大学教育学部学校教育教員養成課程教科教育コース音楽教育系音楽選修(以後、音楽選修と略記)、学部1, 2年の前期、後期の「独唱」の授業を担当してきた。本来は、対面のみ、個人レッスンの授業であったが、中国中部武漢が発生源とされる、新型コロナウイルス感染予防のため、2019年以降、様々な形で、オンライン授業の導入を余儀なくされてきた¹⁾。

一方で、オンライン授業の関係上、範唱等の関係で、様々な理由から、必要に応じて、ボランティアのゲストティーチャーとして、授業を行う上で、どうしても必要であると判断した場合に限っ

*茨城大学教育学部

て、待機している声楽家である藤田香織に応援を頼まざるを得ない場面に遭遇した(この詳しい経緯に関しては、次の「オンライン授業『独唱』における独自の『学び』の成立」に譲るとする)。

こういった流れの中で、筆者達から見れば、オンライン授業に関して、対面に比較して、やむを得ないもの、二次的なもの、好ましからざるもの、という受け止め方は、否めない面もあった。

筆者らは、大学における「独唱」の授業の、対面での実技指導の長所に関しては、体験済みで、筆者らの出身大学での指導教員等の、飽くなき熱心さや、適格性、学生(レッスン生)に対する教育面での情熱等々、筆舌に尽くしがたく、感謝の思い以外に無い。

一方、山田は、教員から見たオンライン授業について、京都大学の教員調査を基に(一部、学生への調査を含む……筆者加筆)、オンライン授業の学習効果、オンライン授業で「良かったこと」、オンライン授業で「困っていること」、オンライン授業の見通しなどについて考察を行っている。

そこでは、「8割強の教員が学習効果を実感²⁾」としており、オンライン授業で「良かったこと」としては、「場所を選ばず、自分のペースが共に(教員、学生共に……筆者加筆)上位、教員より学生にメリット³⁾」としている。また、オンライン授業で「困っていること」としては、教員からの視点として、「授業準備や学生との双方向性に課題、各種ツールの使い方はOK⁴⁾」と述べられている。

最終的に、山田は、オンライン授業についての今後の見込みとして、「(教員……筆者加筆)3人に2人は何らかの形でオンライン授業を取り入れたい考え⁵⁾」と結んでいる。

また、原田は、教員養成大学の合唱の遠隔授業を、Zoomソフトなどを利用した遠隔と対面の両方向から取り組んでいる。ここでは、学生からのアンケートを基盤に様々な創意工夫をした上で、成果をあげている⁶⁾。

そこで、筆者らは共に、オンラインによる「独唱」の授業が、全面的に、よくないものであると決めつけてよいものか、と考えるようになった。

学生へのアンケートにもあったが、ウイルス感染のリスクの無い授業は、魅力でもあった⁷⁾。

授業を展開する過程で、オンラインによる「独唱」の授業に関して、能動的な、学生自身による、様々な面での、独自の「学び」という点から、意識の変更を余儀なくされることは無かったか。

それが問題であった。

それは、最終的には、オンライン授業の「独唱」の授業のみが関係するわけではないが、対面での演奏会⁸⁾へと発展するもの、ととれるものではなかったか。

以下、オンライン授業「独唱」における独自の「学び」の成立、対面の演奏会への準備、演奏会、まとめにかえて、という形で、学生の自主的な「学び」の姿を検討することとしたい。

(本稿は、「はじめに」の1、2頁を藤田文子・藤田香織で共同執筆し、3頁から8頁までを藤田文子が執筆した。)

オンライン授業「独唱」における独自の「学び」の成立

それは、非常にゆっくりとした形であったが、確実にオンライン授業(teamsによるもので、リア

ルタイム発信型であった)の「独唱」に関して、学生の側から、受講に対する姿勢が変わっていった。

主に教師の側から感じたことであるが、以下に列挙することとしよう。

それは、学生の自主的な対応について様々な形で感じられた。

オンライン授業での「独唱」の時間では、web などの関係で、音高、リズムの乱れなど、対面では考えられない、困った現象が起こる可能性を含んでいる。

従って、オンライン授業では、学生達による、機材の確認などは、必須のものであった。

また、対面授業では、教員、学生共に、全員で、同時に行っていた発声なども、音のずれなどにより、難しい面もあった。

その場合、学生の自主的な対応、それを補填する教員側の対応が必要であった。教員は、範唱などの研究に終始し、自分で歌って、模範を示すのが、対面では通常のやり方であった。しかしながら、オンライン授業では、教育効果の点で、危険と考える側面もあり、より慎重な対応が求められた。

そういった意味で、すでに述べたように、藤田文子が、言葉を尽くし、意を尽くし、説明の限りを尽くしても、指導の意図が伝わりにくい場合がごくまれにあった。

教育効果が生じにくい場合に限り、必要に応じ、最小限ではあったが、待機中のゲストティーチャー(藤田香織が担当した)の登場を待つこともあった。

特に、受講する学生の声の質が教員と著しく違う場合、似たような声の質のゲストティーチャーの登場が不可欠なこともあったからである。

こういったゲストティーチャーの登場は、学生には大きな教育効果があった。

極めて少ない回数であったが、自分の声とは何か、教員の意図するものは何か、学生はたちどころに理解し、即座に授業に反映させることができた。

なお、藤田文子は、同じく、学生との双方向性について、大学院生の松田との共著で、中学校音楽科鑑賞の授業実践における教員の対話の展開を、ICT 活用と、美術における「対話型鑑賞」を手掛かりに、論述している⁹⁾。

特に、こういった場面では、ゲストティーチャーの登場が、教員と学生の、双方向の、言葉を尽くした対話の後に、どうしても伝わらなかった場合の、緊急避難的な対応とも思えた。

こうした、「学び」の過程を経て、授業の回を重ねるごとに、教員と学生との対話の可能性は広くなり、一方で深まっていった。

学生の音楽表現を踏まえて、それを尊重した形で、教員が指導をするということもあった。

当然、対面の授業でも可能なことでもあったが、オンライン授業では、学生の能動的な対応がどうしても不可欠であった。

学生側でも、努力して、自分の思いを伝える、これが、オンライン授業では、エネルギーを要するものであった。

教員の側では、「独唱」の授業とは、揺らがない音楽が、学生の中にあって、それを、導き出すこと(ziehen¹⁰⁾)¹⁰⁾が、教育であると、今更ながら、強く感じた授業であった。

特に、オンライン授業では、CD、ブルーレイディスク、楽譜、YouTube など、学生から求めれば、様々なに可能であり、曲の選択などに生きたと言えよう。

結局、オンライン授業の「独唱」では、「演奏者」として、学生達の独り立ちが求められているように思う。

対面の演奏会への準備

こういったオンライン授業での学習が進む中、対面の演奏会出演の可能性が持ち上がった。

すなわち、学生の学習、業績作成を目的に、その年退職の教員が、教え子である在学生などを出場者として、演奏会をするのである。

古くは、藤田文子と同じ音楽教育教室の長谷川敏教授からはじまったことである(藤田文子は、ヴォランティアで司会を担当した)。

次に、同じ教室の佐藤篤教授が、茨城大学の教え子等と共に、演奏会を行った。

両先生共にDVDでの記録も作成した。

今年は、こういった演奏会は、教室において三人目で、藤田文子の退任の年であった。

学生たちは、ホールを借りて、演奏する、これが可能となった¹¹⁾。

今年も、入場無料、ほとんど全ての負担は、学生支援ということで、退任の教員、音楽教室主任、有志の先生方、有志の方々や、関係者の皆様様も、すべて任意の、ご芳志の出演・ご尽力・ご協力ということとなった。

茨城県、水戸市教育委員会、茨城大学楽研(音楽専攻)同窓会、一般社団法人茨城演奏家連盟の後援もいただいた。

学生の曲目選択に関しては、楽譜も含めて、学生の自由な選択を認めたくえて、藤田文子の希望も勘案された。

音楽選修1年から4年の学生有志、任意の参加、などという条件を踏まえ、学生の側で、アカペラを含む、混声の合唱を、合計3曲、自主的に行うこととなった。

主催も、実行委員会が立ち上がり、教員の方々他の皆様方の、強力な助力を得て、極めて、学生主導型の、能動的なものとなった。

教員への相談はあったものの、令和5年(2023年)9月18日(月曜日・祝日・敬老の日)という開催日の都合上、練習は夏休み後の、2回と学生間で決定した。学生の演奏に関しては、すべて、学生の自主練習・自主公演である。

様々な方々のご尽力により、演奏会のチラシ、プログラム、案内状、招待状、会場の係り、調律、録音等に関しても、用意は整った。

もちろん、演奏会の主題は、すべてを包含する、「愛」である(慈愛、男女の愛、自然への愛、師弟愛、親子の愛、友達への愛等々、すべての愛を目指した)。「愛」とは、「大切にすること」の別名でもあった。

常に、筆者たちの心には、「愛でなくて何かあるのか」という思いがあった。

これらはすべて、水戸市民会館から会場の利用許可をいただいた、令和5年(2023年)6月から、急ピッチで進められた。

筆者たちは、この時点で、すべてに、感動した。

演奏会

こういった流れを受けて、当日へ向けた、合唱のステージにおける平台の設置方法なども、教員との綿密な連携を背景に、学生を中心として、粛々と進められていった。当日も、学生の演奏に関して言えば、早朝の学生たちによる平台設置から、同時進行の調律も含んで、リハーサルなど、すべて、学生主体で予定通りに進められた。

ここで、本番の学生の演奏の曲目を示そう。

一曲目は、三木露風作詞、山田耕作作曲、混成二部合唱「赤とんぼ」であった。アカペラで演奏された。

次に、二曲目である。江間章子作詞、中田喜直作曲・編曲の混成二部合唱「夏の思い出」であった。

以上二曲は、現行の中学校学習指導要領(音楽)の歌唱共通教材である。

最後は、石倉小三郎訳詞、シューマン作曲、混成四部合唱「流浪の民」であった。

三曲すべて、指揮、伴奏共に、学生によって行われた。なお、合唱の練習、本番共に、学生自身による相互指導によって進められた。

合唱についての個々の楽曲の演奏の詳細な分析は、紙面の関係もあり、次回に譲ることとする。

本論文では、全体にかかわることを、個々の楽曲の演奏も必要に応じて射程におき、オンライン授業と対面授業に視点を置きつつ、極めて簡単であるが、大要を期することとする。

以下、全体にかかわることを、(1)音楽に関する理解、(2)発声、(3)技術的なアプローチ、(4)表現に分けて検討することとする。

(1)音楽に関する理解

まず、合唱の場合、合唱に関わる全員の、歌う楽曲の、音楽に関する認識の共通性が重要視されると筆者は考える。

筆者の個人的な経験であるが、高校時代、合唱コンクールの全国大会、すなわち本選前夜においても、合唱団員全員の楽曲に関する共通的な理解・認識が試された。

筆者の出身高校の音楽担当の教諭中澤敏子¹²⁾は、暖かい中にも、極めて厳しく、指導を行った。しかもすべてが楽しく、生徒自身が能動的に納得・理解できるような指導であった。中澤の、体を通した、真剣な、しかも美しい歌声は、筆者には今でも貴重な体験で、筆者が音楽担当教員を進路として選択する礎になったと言っても過言ではない。

そういった意味で、今回の合唱における楽曲に関する、コンセプトは、全員に十分理解されていたように思う。

筆者が考えるに、楽曲理解は、声の色に関係し、そこに一致が見られない場合、合唱全体に支障が生じるのではないかと考えている。

ただ、ここで注意いただきたいのは、この形は学生個々人の考え方によるもので、強制的でな



資料1 演奏会のブルーレイディスクジャケットの表紙撮影/編集Ru-to 高橋徹氏提供

く、極めて、自由度の高い、共通認識であると筆者は考えている。

ここでも、本学の「独唱」、「合唱」の授業担当、谷川佳幸教授(以下、谷川教授と略記)の指導が生きたように思う。

対面、オンライン授業の区別なく、表現において、齟齬無く展開していることに関して、谷川教授にも、他のすべての教員、学生にも深く感謝を述べたい。

(2)発声

発声についてであるが、息にのった、ビブラートの少ない発声であった。また、谷川教授の「独唱」の指導に大きく助けられた。

学生の発声は、「赤とんぼ」のアカペラは言うに及ばず、「夏の思い出」についても、ハモリもあり、響きのある、透明感のあるものであった。

清浄な、美しい発声で、「流浪の民」のソロのパートでも、全体から逸脱することなく、そのメロディーが生きた。

(3)技術的なアプローチ

技術的なアプローチについて言えば、学生個々人の学習の成果は大きく、極めてレベルの高いものであった。

(4)表現

統一感のある、全体に調和した表現であった。

以上、極めて大つかみであるが、全体にかかわることを述べた。

ここでは、対面授業、オンライン授業の区別なく、矛盾をはらまず、それぞれの「学び」が、相乗効果的に、大きく結実したように思う。

また、伴奏等には、田中宏明准教授、秋葉桃子助教のピアノの非常に高いレベルでの指導が感じられた。音楽全体の理解などについても、今までの全員教員の指導、学生の「学び」の姿勢に、感謝あるのみである。

まとめにかえて

以上、極めて駆け足であるが、教員養成大学の「独唱」の授業に関して、オンライン授業、対面授業に視点を置きつつ、対面の舞台での演奏会への軌跡を中心に検討してきた。

そこでは、オンライン授業で培った、「演奏者」として、学生達の独り立ちともいえる「学び」、すなわち、学生自身による、主体的な、「学び」の姿勢が十分に感じられた。

そして、こういった「学び」は、対面授業においても、展開は期待されていると筆者は考える。

今後も、こういった「学び」を継続してくれることを、筆者は信じている。

最後に、関係各方面の方々に深く感謝したい。

身に余る幸甚であった。

注

- 1) 文部科学省高等教育局大学振興課 「学事日程等の取扱い及び遠隔授業の活用に係る Q&A の送付について（4月21日時点）」, ([mext.go.jp](https://www.mext.go.jp/content/20200421-))<https://www.mext.go.jp/content/20200421->

mxt_kouhou01-000004520_7.pdf(2023年11月14日3時49分閲覧).

- 2)山田剛史「教員から見たオンライン授業—京都大学での教員調査から—」(nii.ac.jp)国立情報学研究所@2020.9.25「第17回4月からの大学等遠隔授業に関する取り組み状況共有サイバーシンポジウム」, https://www.nii.ac.jp/event/upload/20200925-08_Yamada.pdf(2023年10月13日7時57分閲覧)p.10.
- 3)注2掲載文書11頁参照。
- 4)注2掲載文書12頁参照。なお、松田京也・藤田文子「中学校音楽科鑑賞の授業実践における教員の対話の展開に関する研究—ICT活用と美術における「対話型鑑賞」を手掛かりに—」『茨城大学全学教職センター研究報告』,2022,pp.176-187.も参照されたい。
- 5)注2掲載文書13頁参照。
- 6)原田博之「教員養成大学における合唱の遠隔授業—遠隔と対面による実践の成果と課題—」『宮城教育大学紀要』,第55巻,2020,pp.173-184.
- 7)このアンケートは、2023年10月27日(金曜日)授業中に行った。
- 8)藤田文子先生を囲む演奏会実行委員会主催「—茨城大学教育学部音楽教育教室退任記念—藤田文子先生を囲む演奏会」(2023,9,18,13:30開演[13:00]会場,水戸市民会館ユードムホール[中ホール]).
- 9)注4後半に掲載の論文。
- 10)(ドイツ語)引き出す(『木村・相良独和辞典新訂』株式会社 博友社,1989 第28刷)p.1744.)
- 11)注8参照。
- 12)筆者在学当時、茨城県立水戸第二高等学校教諭であった。音楽の授業、合唱部の指導などを担当した(額賀せつ子『中澤敏子・中澤敦子～探し求める心今もやまず～』(K5 ART DESIGN OFFICE, 2022), pp.6-74,<https://yomiuri-townnews.com/nakazawa-toshiko/2022/01/03/> [2023年11月30日22時5分閲覧].参照)。